

『葵巻古注』と『水原抄』の関係

鎌倉時代の『源氏物語』古注釈の利用

カラーヌワット・タリン

はじめに

『水原抄』は鎌倉時代の代表的な『源氏物語』古注釈であり、河内本『源氏物語』を校合した源氏学者の源光行、親行の手により作られたもので、その名は現在までよく知られている。にもかかわらず、『水原抄』は何らかの理由であまり普及せず、室町時代あたりから、誰も伝本を確認できない状態になり、幻の本になってしまった。『水原抄』の内容は現存している注釈書にみられるいくつかの逸文しか知られていないのである。

しかし、昭和初期に池田亀鑑氏がきわめて珍しい卷子本の『源氏物語』(いわゆる『葵巻古注』)を発見し⁽¹⁾、この本こそが『水原抄』そのものではないかと推断した。これに対して、重松信弘氏は、『葵巻古注』の注釈内容が、『水原抄』の秘説中の秘説を抄録したとされる『原中最秘抄』の「葵」巻に採られている項目の記載内容と一致しないため、池田説を否定した⁽²⁾。その後、寺本直彦氏は、それらの項目を検討し、『原中最秘抄』の掲載している内容は河内方の「秘説」であるので、『水原抄』の内容と全く一致することとはあり得ないと論じ、池田説を支持した⁽³⁾。それに加えて、田坂憲二氏の論では、それまでの先行研究が言及していなかった『葵巻古注』の特徴を詳細にあげた上で、結論としては「否定説の論拠がない以上、現在の段階では『葵巻古注』が『水原抄』と断じてよい」と述べている⁽⁴⁾。ただし、伊井春樹氏の『源氏物語 注釈書・享受史事典』⁽⁵⁾の「源氏物語古注」の項目

では「たしかに『水原抄』の蓋然性はありはするが、断定するまでにはいたっていないといえよう」と述べ、さらに、『水原抄』の項目では「なお、葵巻の本文に注記の存する卷子本の『源氏物語古注』は、『水原抄』の逸書かとされるが、蓋然性はあるものの断定するにはためらいも存する」と判断を留保している。

それらの先行研究に対し、稿者はかつての論文で『葵巻古注』の本文区分の特徴について考察したが⁽⁶⁾、『葵巻古注』が『水原抄』であるか否かという点にはあえてふれなかった。それは、稿者には当初から『葵巻古注』の先行論に対する疑問があったからである。本稿では、その疑問点を示し、検討を加えることで、『葵巻古注』が『水原抄』との関わりをもつことはみとめるものの、『水原抄』そのものとは考えられないということを論じる。

『葵巻古注』に対する疑問は、『葵巻古注』が卷子本であり、しかも「葵」巻本文の全文を掲載するという点で、現存している同時代もしくは近接する時代の諸注釈書とは二重の意味で体裁が異なっているところにある。しかも、池田論文以外の先行論はいずれも『葵巻古注』の注釈内容を重視し、『葵巻古注』自体の基本的な問題、つまり、なぜこの本は卷子本の形態で、かつ本文を全て載せているのかという点について検討してこなかった。『葵巻古注』の注釈内容が仮に『水原抄』に一致するとしても、『水原抄』から引用された注記である可能性、すなわち『葵巻古注』が『水原抄』そのものではないということもありうるだろう。本稿ではまず、『葵巻古注』はどのような『源氏物語』写本なのかを簡潔にまとめ、次に、池田論文の問題点を

Abstract

指摘する。さらにその問題点を検討した上で、『葵巻古注』が『水原抄』そのものとは考えにくいことを明らかにし、合わせて『葵巻古注』の利用のされ方と利用者を想定してみる。

一、『葵巻古注』の成立

『葵巻古注』は、呼び名の通り『源氏物語』の「葵」巻しかない。一見して非常に古いものとみとめられることから、鎌倉時代末期の本ではないかと推定された⁽⁷⁾。本書の形態は卷子本形式であり、同時代のものの中には同じ形態を持つているものが見当たらないので、非常に珍しいものである。⁽⁸⁾『葵巻古注』は前半の七海本と後半の吉田本があり、七海本は「葵」巻の冒頭から葵上が夕霧を出産後、「の、しりさはくほと夜中にもなりぬればやまのさすなに」という本文までとなっている。一方、吉田本の始めは七海本と完全につながっていて、「くれのそうつたちもえさうしあえ給はず」という部分から「葵」巻の終わりまでである。だが、残念ながら、吉田本には脱落部分があった。それは、葵上の死後、四十九日の忌が明けることが語られた後の部分で、「いと、まちとをにそなりたまはんとおもふにいと」で文章が切れ、それ以下、源氏が桐壺院や藤壺のもとへ参上する場面と、「葵」巻後半の最も重要な場面というべき、源氏と紫上との新枕のことが欠落しているのである。翻刻の解題では、「もともと完備していたものがならぬかの事情によつて切り出されたのであろう」と推察された⁽⁹⁾。そのような次第で、「葵」巻の四分の三程度しかないのである。

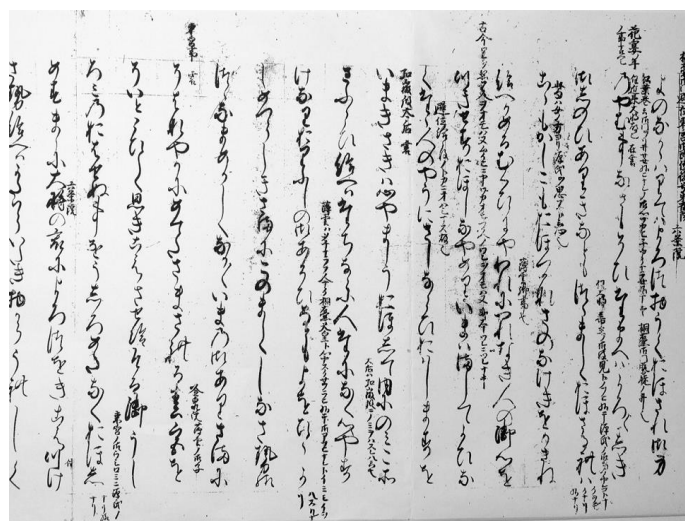
『葵巻古注』のもう一つの大きな特徴は、『源氏物語』「葵」巻の河内本系統の本文を全て掲載していることである。本書は最初に『源氏物語』の「古注」として紹介されたものの、実際には『源氏物語』の写本の一種とも言いうるもので、やや大きめに書かれた本文の行間、および上方に注釈が漢字片仮名混じりの小さい文字で書かれている(図1)を参照)。また、やや長い注釈は本文の裏面の直後に書かれ、大体三〜四行以内きれいにまとめられている⁽¹⁰⁾。裏面に注釈がある部分はほとんどの場合は本文の隣に、「裏」か「在裏」と示されている。注釈内容は歴史、故実有職、引歌など幅広く、

他の巻の『源氏物語』の本文や系図まで記されている箇所もいくつかある。なお、仏典では卷子本形式の注釈が多くあり、裏書の特徴もある程度共通する面がある。

『葵巻古注』はおおよそ右のような本である。これを『水原抄』であると容易に断言できない理由としては、本書に『水原抄』の名前がどこにも書かれていない点と、『水原抄』の逸文の中に「葵」巻の項目が一例も見出せない点の二つがある。とはいえ、『葵巻古注』は『水原抄』そのものであるとなかろうと、『源氏物語』の研究にとつて、非常に興味深い体裁と内容をそなえた資料の一つであることは間違いないのである。

続いて、『葵巻古注』が発見されたときから、現在までの先行研究をおさえておこう。

二、『葵巻古注』の先行研究



〈図1〉『葵巻古注』七海本(冒頭・複製本)

池田氏の論文では、「七海本」のみ扱っており、『原中最秘抄』『河海抄』『仙原抄』『花鳥余情』などにみえる『水原抄』逸文や親行説の逸文を基にして、『水原抄』の原形と性質を推測している。池田氏が推測した『水原抄』の性質は『葵巻古注』と完全に一致するとされ⁽¹¹⁾、『葵巻古注』が『水原抄』そのものであると結論付けた。ただし、七海本の「タヒシカハラ事」と「左近藏人事」の項目が『原中最秘抄』にもあ

げられていて、しかも、その内容が一致していないことについては池田氏自身が気づいていた。

その後、重松信弘氏は池田氏も注目していた『原中最秘抄』との比較を通じて、『葵巻古注』が『水原抄』ではないと、池田論を否定した⁽¹²⁾。それから、この研究は五〇年ほど放置されたが、一九八五年に、寺本直彦氏によって重松説は否定されることとなった⁽¹³⁾。寺本氏は、前述した七海本の問題となつている二項目と、さらに、吉田本にみられる、「界法三昧普賢大土」という一項目の注釈内容を『原中最秘抄』の内容と比較・検討した上で、次のように両者の齟齬とみられた点を説明した。

『原中最秘抄』は、『水原抄』の秘説をそのまま抄出したものではなく、『水原抄』の勘注をふまえながら、それ以外の注が加えられるべきものである。したがって、『水原抄』の勘注と『原中最秘抄』の勘注とが「全く一致している」ことはあり得ないのであり、問題は両者が矛盾なく関連しているか否かということである。

最後に寺本氏は次のように結論づけている。

全体的にみれば、葵巻古注は『水原抄』たるべき諸条件をほとんど満たすのであり、かつまた『水原抄』以外、これに相当する河内方古注は他にないとするれば、この卷子本源氏物語古注葵巻は『水原抄』の零簡かとする故池田亀鑑博士の提案に対しては、然りと答えざるをえないと思われるのである。

その後の田坂憲二氏の論文では、寺本論に賛同しつつ、さらに検討を加え、今まで言及されていなかった『葵巻古注』の特色を整理した。田坂氏の結論は「他に否定説の論拠がない以上、現在の段階では『葵巻古注』を『水原抄』と断じてよい」ということである⁽¹⁴⁾。

このように、『葵巻古注』の先行研究では、重松論文以外のすべてがこの本を『水原抄』であると断じているが、最初の池田論文以外は、注釈内容のみに注視して、いずれも『葵巻古注』の形態、およびそれに関して池田論文が示した根拠を検討していない。稿者は、池田論文には大きな問題が残っていると考えている。それらについては次節でとりあげる。

三、池田論文の問題点

『葵巻古注』を発見した池田氏の論文に関して、稿者が抱く疑問は次の三点である。

A、『水原抄』が卷子本形式だったとする根拠の問題

B、『水原抄』の性質と『葵巻古注』の性質の問題

C、『水原抄』に『源氏物語』本文の全文が掲載されている問題
以下、これらの点について詳しく検討する。

A、『水原抄』が卷子本形式だったとする根拠の問題

池田論文では、なぜ『水原抄』は卷子本形式であったのかについて述べている。そして、そのことを理由の一つとして、卷子本である『葵巻古注』が『水原抄』そのものだとして結論づけている。しかし、その根拠は妥当かどうか、まず、池田氏の論述内容を確認してみよう。

池田氏は、『水原抄』と『原中最秘抄』の原形についてのヒントを前田家本『原中最秘抄』の奥書に見いだした。

・前田家本『原中最秘抄』

光源氏物語相傳事、自曾組光行至行阿四代、所令相読也、随而此物語五十四
回・同水原抄五十四回・并原中最秘抄上下二回、其外口伝故実当道之庭訓悉
令伝受者也……

池田氏は、この奥書から『水原抄』と河内本『源氏物語』が別のものであることを確認し、あわせてこの奥書において「此物語五十四帖」、「水原抄五十四巻」というように、「帖」と「巻」の使い分けがあることから、『水原抄』の原形は『原中最秘抄』と同じで、河内本『源氏物語』の冊子本形態とは違っていたと推測した。その際、現存している『原中最秘抄』で卷子本形式のものが見当たらないにもかかわらず、池田氏は『原中最秘抄』の「落漂」巻にある注釈内容にもとづいて『原中最秘抄』の原形は卷子本だったと推測した。

・『原中最秘抄』「滯漂」巻

源氏大納言内大臣ニ成給又云々

行阿云内大臣事(中略)周公旦ハ文王ノ太子、源氏君ハ桐壺ノ御子也、

周公旦写宰相

源氏君任内大臣相叶此義者歟裏ニアリ

注目されたところは、この注釈の一番最後にみえる「裏ニアリ」である。

この「裏ニアリ」とはどういう意味だろうか。池田氏は次のように説明する。

「裏ニアリ」といふのは裏書に在りといふ意味ではないであらうか。

代々書きつぎをして行く家の秘本が「秘抄」とまでよばれて重んぜられた秘説・口伝・庭訓を記した最貴重裏ニの書が、片々たる冊子で、貼紙だらけで書き足してあつたと考へるよりも、かういふ種類の本に有り勝ちの卷子本であつたと考へる方が、もつと自然ではないであらうか。

原中最秘抄が已に卷子本であつたとすれば、水原抄もまた卷子本であつたのではないかと考へても、必ずしも不当であるとは言へないと思ふ。

そしてもし卷子本であつたとするならば五十四巻から成つてゐたであらうといふことは、前期の奥書によつて想像される事である。

つまり、池田氏の論では『原中最秘抄』の原形が卷子本であり、この注釈内容が裏面に書かれていたものだから、『原中最秘抄』が冊子に整理された際、卷子本でしか使われていない文言が残されたとみている。これによつて、『原中最秘抄』の原形が卷子本であつたとすれば、『水原抄』も卷子本であつたのではないかと結論つけた。果たしてこの結論が正しいものかどうか、検討を続けよう。

池田論文では、原形が卷子本だった『源氏物語』古注釈として、『水原抄』、『原中最秘抄』だけではなく、『河海抄』の名前も挙げてい(15)る。その根拠としては、『河海抄』の中にも「裏書」という文言がいくつかあり、さらに、

東山御文庫蔵『七毫源氏』にも「河海抄裏書云」がみえることがあげられている。

その『七毫源氏』の「総合」巻の巻末の「河海抄裏書云」について説明し

ておく。「総合」巻の最後の丁の裏に、前半は「河海抄裏書云」としてその内容が、また後半は単に「河海抄」としてあり、その内容が示されている。後半の「河海抄」の部分は現存する『河海抄』(天理図書館や龍門文庫などが所蔵している中書本系統の諸本など)の本文中に確認ができた。一方、「河海抄裏書云」の内容は『河海抄』の中に見当たらない。池田氏は『河海抄』の「裏書」に対して、「河海抄」がもと卷子本であつて、後人がそれを冊子として書き改め、内容の大整理を試みようとして、(中略)はじめから冊子に書かれて単にそれを写すといふ程度のものであつたなら、あれほど乱れるわけではない。(16)と推察している。『河海抄』については本稿では本格的に扱いきれないが、この裏書のことにはある程度丁寧確認しておく必要がある。

『河海抄』に記される「裏書」は全八項目があり、いずれも短い注釈である。表の余白に書き切れないほどの量ではない。次に三例ほど掲出してみる。

・『河海抄』「紅葉賀」巻

御うちきの人めして

裏書御クシラハラフハ上臈也スマスハ中臈也〔不本〕

・『河海抄』「竹河」巻

九日にそまいる給

后妃也裏書云〔不本真本ナシ〕

・『河海抄』「竹河」巻

よの人のすさまじきこといふなるしはすの月夜：

裏書に老女也〔不本裏書以下ナシ〕

注目したいのは『河海抄』の「裏書」は『河海抄』全体にわたっているとはいいがたく、「紅葉賀」巻の一項目以外は、いずれも「竹河」巻と宇治十帖の例ばかりであった。しかも、これらの注釈内容は、実のところ『河海抄』

注目したいのは『河海抄』の「裏書」は『河海抄』全体にわたっているとはいいがたく、「紅葉賀」巻の一項目以外は、いずれも「竹河」巻と宇治十帖の例ばかりであった。しかも、これらの注釈内容は、実のところ『河海抄』

注目したいのは『河海抄』の「裏書」は『河海抄』全体にわたっているとはいいがたく、「紅葉賀」巻の一項目以外は、いずれも「竹河」巻と宇治十帖の例ばかりであった。しかも、これらの注釈内容は、実のところ『河海抄』

のオリジナルかどうかは分からない。『河海抄』の中に、四辻善成の案が「今案」や「案之」として記されている項目は多数みられるが、「裏書」の注釈の中にはそのように明示している例がみられない。他方において、『河海抄』に限った話ではないが、四辻善成は他の注釈書などの注記を引用する際に悉く出典を明らかにしておらず、たとえば『光源氏物語抄』（『異本紫明抄』）などの先行する注釈書の名を示さずに同一と見なされる注釈を掲げている場合などもかなりみられる¹⁷。従って、「裏書」の内容は何らかの卷子本型の注釈書から写されたことを示唆している可能性もあろう。その注記そのものが『河海抄』オリジナルのものとは限らないわけだから、『河海抄』の原形が卷子本であったと断じるわけにはゆかないだろう。一方『七毫源氏』『絵合』巻の示す「河海抄裏書」はどういうものなのか不明だが、もし『河海抄』の原形が仮に卷子本だったとすれば、このような「裏書」からの引用を示す例が、この箇所だけではなく、もつと多くみられるのではないか。つまり、『河海抄』の原形を卷子本であると確定的にいうことは困難であるといわざるを得ないのである。

右に述べたような事情は、『原中最秘抄』の場合も同様である。「裏ニアリ」という文言があつたとしても、それは『原中最秘抄』のオリジナルのコメントとは限らない。すなわち、先行する注釈の文言がそのまま引用されている可能性を否定しきれないのである。むしろ、原形が卷子本だったとしたら、もつとこのような文言が多くみられたのではないかと推察されるのである。『原中最秘抄』の原形が卷子本であつたかどうかはわからない以上、当然、『水原抄』が卷子本であつたという、さらなる推論も成り立たなくなる。

B、『水原抄』の性質と『葵巻古注』の性質の問題

『河海抄』、『珊瑚秘抄』、『仙源抄』などから『水原抄』の逸文を拾ってみると、およそ六〇項目がある（『水原抄』と示されていないが、親行の名前がみえる説を含むと、一〇〇項目ほどある）。池田氏はこれらの『水原抄』の逸文を分類し、『水原抄』の注釈内容の性質を検討している。その結果、『水原抄』の性質は大別して次の八項があるとした。

一、仮名に漢字をあてた簡単な語釈

二、文字・語句・文章等の釈義

三、和漢の文学・史実・伝説等の出典を注したるもの

四、諸種の事項の考証を注記したるもの

五、諸本の本文の考異を注したるもの

六、疑問のままとして勅物を示さざるもの

七、源氏物語研究に関する古人の逸話の如きものを記したるもの

八、源氏物語中の人物・事件等について考証したるもの

これらの性質について、池田氏はさらに次のように述べている。これは大事なポイントなので、いささか長い引用となるが諒とされたい。

水原抄は―特に水原抄の初期の形態は、源氏物語の本文傍・頭・脚等に試みられた書入本ではなかつたかと考へられる。否さう考へるより外に自然な考へ方はないと思ふ。最初の注釈の形態が、書入本であることについては、伊行の源氏釈や定家の奥入等が己に実証してゐて、少しも不思議ではない。たとひ後人によつて注のみを集められるような事があつたとしても、少なくともその初期に於て、しかも重代の家の本に於ては、恐らく書入本の形であつたに相違ないと思ふ。

もし水原抄が源氏物語の書入本であつたとすれば、あの豊富な内容はどうして書入れられたのであらう。恐らくそれは冊子ではなく、卷子であつたからであらうと考へられる。卷子本の裏面を利用しなければ、冊子の余白だけでは絶対にあれほどの大きな内容を書入れることはできないであらう。重代の家の秘本であり、代々考勅を追加して行つた水原抄が、冊子であるよりも卷子本である方がどれだけ自然であるか知れない。

確かに、『水原抄』の逸文からみると、『水原抄』の注釈の内容は豊富で幅も広い。しかし、そのような理由によつて『水原抄』の形態が卷子本でなければならなかつたと考えるべきであらうか。実は、池田氏がまとめた『水原抄』の八種の性質というのは、同時代の『光源氏物語抄』や『紫明抄』にも全部そのままではまるのである。だが、いずれの伝本も卷子本型式ではないし、

卷子本であったことを示唆するような記事も見当たらない。『水原抄』（『原中最秘抄』の奥書によると五十四卷）の分量は『光源氏物語抄』（五卷）や『紫明抄』（一〇卷）よりはるかに多い可能性は高いだろうが、豊富な内容を持つというだけで、卷子本型式だったと推察するのは無理がある。しかも、分量が多ければ多いほど、実は卷子本の方こそ冊子本よりもよほど扱いにくくなるのである。

さらに大事なことは、現存する『葵巻古注』をみると、たしかに裏書があるのだが、注（10）で述べたように、『葵巻古注』の裏書きされた注釈の大半は三、四行程度の長くないものばかりなのである。卷子本型式の『葵巻古注』が、本当に親行の『源氏物語』研究成果を集めている『水原抄』そのものだと考えて良いのか、疑問をいだかざるを得ない。

池田氏の示した『水原抄』の性質の中に、もう一つの重要な問題がある。それは先にまとめて示した八項の七番目、「源氏物語研究に関する古人の逸話の如きものを記したるもの」である。池田氏によると、「これは俊成・光行・西円・親行等が『源氏物語』を研究するにあたって経験したような様々の研究上の逸事の如きものを記した」という特徴である。具体的には次のような例がみられる。

・『河海抄』「花宴」巻

さかゆくはるにたちいてさせ給へらましかは世のめいほくにや侍らまし

水原抄曰此哥詞遺文歟但定家卿所覽本さか行時とありける歟云々

・『河海抄』「松風」巻

ことりしるしはかりひきつけたるおきのえたなとつとにて：

西円法師といふもの草に枝あるへからすといふ義を執して木の枝とよみけり親行にあひてさま／＼に問答しけるよし水原抄にも載之親行又草の枝の支証として古今の萩の露玉にぬかんととれはけぬよしみん人は枝なからみよ：

・『河海抄』「幻」巻

うないまつにおほえたるけはひ

(略)：

水原抄云大国には人の墓のしるしに小松をならへうふる事あり云々若は又峯つゝきなみ木などにもひとしくおなすかたなる松を馬鬣松と号する歟此松を馬のたちかみにたとへたりたとへはたけひとしかるへき心也然は紫上のたけすかたに中将の君思よそへられてたゝならましよりはらう／＼しとある歟如何子此事俊成卿殊難義也云々：

右にあげた逸文にみられるように、『水原抄』には親行と同時代の学者たちとの問答が記されているのである。これらの例は『河海抄』から引用したもののばかりだが、他の『水原抄』の逸文でも、このような性質がみられる項目は少なくない。だからこそ、この性質は池田氏自身も認めていたわけだが、寺本氏の先行論では『水原抄』の性質があらためて整理される際に、この点は削除されてしまった。削除した理由は簡単で、それは『葵巻古注』にこのような性質が一つも見当たらないからであろう。池田氏もこの点について気がつかないはずはないと思うが、『水原抄』逸文の中にしばしば見いだされるこの特徴的なタイプの注記が『葵巻古注』に一切含まれない理由について、氏の論文は何も述べていない。『葵巻古注』の中に、この『水原抄』にみえる明確な性質が見いだされなければ、『葵巻古注』は『水原抄』と「完全に一致」などとは言えないのである。

稿者は、この問答形式の注釈が『水原抄』の中でも最も重要だと思つていゝる。なぜならば、これは親行が同時代の学者達に質問したり取材したりした結果を、記録のように書いたもので、親行の『源氏物語』研究の積極的な努力を表している内容だからである。しかも、このような問答形式の注釈内容は、『水原抄』だけではなく、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『原中最秘抄』、『河海抄』、『珊瑚秘抄』など、比較的近い時代の注釈書において一般的といえるほどよく見られるものでもある。『葵巻古注』に全く現れていないのはなぜか。それは、親行が『葵』巻に限ってはどこにも疑問を抱いていなかったというよりも、『葵巻古注』の注釈内容は簡略化されていると想定するほう

が妥当ではないだろうか。

以上AとBの二点、すなわち『葵卷古注』の卷子本形式と『水原抄』の重要な性質にかかわる問題について検討してきた。『水原抄』は本当に卷子本でなくてはならなかったのかという点、膨大な注釈を有する大部の『水原抄』には、むしろ冊子本こそがふさわしいようであった。また、『葵卷古注』の中に『水原抄』逸文にしばしばみられる問答形式がないことも、『葵卷古注』が『水原抄』そのものとは考えにくい面である。

『葵卷古注』は確かに『水原抄』との関わりは有するだろうが、稿者としては、『水原抄』から注釈をとり出し、その内容を簡略化し、『源氏物語』の本文に添えて、卷子本形式に仕立てられたものではないかと推定する。従って、『葵卷古注』の注釈と『原中最秘抄』の内容の関連ばかりに注目すると、この本は間違いなく『水原抄』だという結論になってしまうのだろう。しかし、右にみてきたように『葵卷古注』が『水原抄』そのものとは考えられない点は無視しがたいのである。

『葵卷古注』にはまだ問題がある。それは、この本における『源氏物語』本文の問題である。

C、『水原抄』に『源氏物語』本文の全文が掲載されている問題

前述したように、『葵卷古注』は『源氏物語』「葵」巻の本文を全て掲載する本である。池田論文では、『水原抄』に『源氏物語』の全文が掲載されていたことを示す根拠を『原中最秘抄』の中に見いだしている。

・『原中最秘抄』「行幸」巻

ハネヲナラフルヤウニテオホヤケノ御ウシロミモツカウマツラント思ヒ給シヲ

水原抄ニ不載此尺

・『原中最秘抄』「御法」巻

ワカ宮マロカ桜ハサキニケリイカテ久シウチラサシ木ノメクリニ丁ヲタテカ

『葵卷古注』と『水原抄』の関係―鎌倉時代の『源氏物語』古注釈の利用―

タヒラアケスハ風モ吹ヨラシト

此事本二尺ナシ

池田氏は、これらの注釈をとらえて、「即ち、水原抄の中には、注釈を必要とする源氏の本文を特に揚げておきながら、勅物を付していないものがあつたと見ることができようであらう」と述べた。しかし、「水原抄ニ不載此尺」といった類の言及は、池田氏が指摘したように『水原抄』に本文だけがあり、注釈を添えていなかったという意味だろうか。あるいは、単にこの項目は『水原抄』にあげていないという意味ではないだろうか。『水原抄』は現存しないので、『水原抄』と『原中最秘抄』との関係に類する、『河海抄』と『珊瑚秘抄』との関係に注目し、比較してみよう。

『珊瑚秘抄』には三二項目があり、その内、『河海抄』の中に「秘説」や「秘事」と示されている項目は二〇項目ある。また、八項目は『河海抄』に項目があるが、「秘説」と示されていない。そして、残りの四項目は『河海抄』に全く見出されないものである。このように、『珊瑚秘抄』の中にみられる項目が『河海抄』の方では見当たらないという例から察するに、『原中最秘抄』の中に項目があつても、『水原抄』にはその項目がないということはありうるであろう。従って、『原中最秘抄』に「水原抄ニ不載此尺」や「本二尺ナシ」とあることをもって『水原抄』に『源氏物語』本文の全文が載っていたと推断しうるわけではないと思う。

さらに、『葵卷古注』に掲載されている『源氏物語』の本文にはなお疑問がある。それは大きく書かれた『源氏物語』の本文と、注記の中で改めて引用された本文との間に異同がある点である。もし『葵卷古注』が『水原抄』であるならば、なぜ、同じ本から引用した本文に異同が生じたのだろうか。以下、例をみてみよう。

イ、『葵卷古注』325、『源氏物語大成』(294-01)

すきにける御めのとたつひともしはおやの御かたにつけつゝ、…

『葵巻古注』 325

スキニケルモノトタツ^モトハ：

『葵巻古注』の本文は「すきにける御めのとたつひと」で、それに対応する裏面の注釈の中に改めて本文があげられているが、ここでは「スキニケルモノトタツモノ」である。このように、この本文にある「ひと」と「モノ」が一致していない。表と裏の違いはあるが、両方の本文が書かれている位置は非常に近い（裏の直後）ので、書写のミスとは考えにくい。もし『水原抄』が本文全文の載せられている注釈書だったとしたら、このような本文異同は起こらなかっただろう。可能性としては、この注釈が元々『葵巻古注』の親本から写されたものではなく、別の本から転写されたと考えた方が自然ではないだろうか。さらに、このような例は他にもある。

口、『葵巻古注』 331、『源氏物語大成』(296-08)

御禊ノ時ノ車アラッヒノ事ナリ
はかなき事のおりふしに人の：

『葵巻古注』 331

此巻ニ云クトシコロハイトカ[□]シモアラサリシ御イトミコ、ロヲハカナ

カリシ車ノトコロ

アラソヒニ人ノ心ウコキニケルヲカノ殿ニハサマテモオホシヨラサリケ
リ云々

『葵巻古注』の『源氏物語』本文は「はかなき事のおりふしに人の：」で、その行間に「御禊ノ時ノ車アラソヒノ事ナリ 裏」の傍注がある。裏面をみると、「此巻ニ云ク」以下で、「葵」巻の本文が改めて書かれているのである。『葵巻古注』には本文全文が掲載されているにもかかわらず、改めて同じ巻の本文をあげるのなぜか。過剰なまでに丁寧な作り方をしているか、さもなければ、他の本から引用したこと以外、考えられないだろう。しかも、

この注釈に引用された本文と『葵巻古注』の表にある当該箇所の本文をみてみると、次のように異なるがある。

『葵巻古注』 326、『源氏物語大成』(294-08)

…さるとしころはいとか[□]しもあらさりし御いとみこ、
ろをはかなかりしくるまのところあらそひに人の

圃[□]こゝろ[□]うこきにけるを・かののにはさまてもおほ
しよらさりけり：

このような本文の異同があることで、『葵巻古注』の本文と、裏の注釈内に引用された『源氏物語』の本文は同じものだったのかという疑念が強くなる。

次の例からも、同様の疑問が生じる。

ハ、『葵巻古注』 351、『源氏物語大成』(304-04)

…おほしなけきとふらひきこえさせたまふさまかへ

ウレシキセニモマシリテ事

りておもたゝしけなるを・うれしきせもましりて：

この箇所の裏面にある注釈内容は『後撰和歌集』の和歌だが、問題は裏面ではなく、表の本文の行間にある。大きく書かれている本文は「うれしきせもましりて」で、一方の行間に書かれている本文は「ウレシキセニモマシリテ」である。この場合は、大きく書かれている本文の隣にあるにもかかわらず、異なるがある。「に(二)」一文字の有無というわずかな違いではあるが、この傍注はこの本文から直接に作られたものとは考えにくい。他の本から転写した可能性のほうが高いのではないだろうか。

このような本文の異同がいくつかみられることから、稿者は『葵巻古注』の注釈は『葵巻古注』に元々備わってあった注釈ではなく、他の本から転写された可能性が高いと考える。つまり、『葵巻古注』とは、まず河内本『源

氏物語』の本文が写され、次いで適宜簡略化された注釈を添えられたものと推定するのである。

これらの本文異同の例以外に、もう一つ、とても興味深い項目がある。それは、注釈が河内本『源氏物語』に対するものではなく、定家本(青表紙本)の本文に対する項目となっている例である。

二、『葵巻古注』3253、『源氏物語大成』(304-12)

…かゝるよはひのすゑにわか

もこよふ事トハ、 さかりのこにおくれたてまつりてもまとふ事ト
こよ 或証本如此

モコヨフ

透 蛭 日本紀 ちなきたまふをこゝらの人かなしくみたてまつる…

モコヨフ
蟲 紵 同

この本文からみられるように、『葵巻古注』の本文は「たてまつりてもまとふ事」とあり、「まと」の隣に「こよ」と傍記されている。さらに、頭注をみると、「もこよふ」についての短い注釈がある。『源氏物語大成』や『河内本源氏物語校異集成』を確認すると、この本文は次のような異同がある。

・『源氏物語大成』(304-12)

【河】 もこよふ—まとふ河

【別】 もこよふことゝ—ことうことゝ、御—まかよふと陽

・加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』風間書房、二〇〇一年

たてまつりて—たてまつりても〔墨〕尾—たてまつりても海(七海本)

もこよふ—まとふ河 —まと(こよ) ふ海

河内本『源氏物語』の本文は、いずれも「まとふ」であり、「もこよふ」

ではない。従って、『葵巻古注』のこの頭注は定家本の本文に対する注釈である。もし、『葵巻古注』に傍記の「こよ」が書かれなければ、この頭注は意味をなさないのである。それゆえ、『葵巻古注』には小さい文字「こよ」があつて、「或証本如此」が記されているかもしれない。この例は『水原抄』の問題には直接関わらないようにもみえるだろうが、『葵巻古注』という一種の河内本『源氏物語』の中に定家本系統の本文に対する注記が記されているという特異性ゆえにとりあげてみた。果たしてこのような注記が本来の『水原抄』に含まれていたとみることは可能なだろうか。即断はしたが、可能性としては、『葵巻古注』の作成される段階で定家本系統の情報が転記されたということもありうるのではないか。

四、『葵巻古注』の利用者の想定

『葵巻古注』が『水原抄』のものではないとするならば、両者はその体裁、注釈のあげ方と分量などから察して、利用の仕方が異なっているのではないか。ということはそれぞれにふさわしい利用者が想定されていることになる。以下、『水原抄』と『葵巻古注』の利用のされ方、ならびに具体的な利用者について想定してみたい。

『水原抄』は河内方の注釈書であり、既に指摘されているように、大部の注釈書だったことがわかつている。その分量は『光源氏物語抄』、『紫明抄』、そして『河海抄』のような同時代もしくは比較的近い時代のもものと比較してみると、はるかに多いと推測する。そのような分量の多い注釈書は卷子本にするとしたら、どれだけ手間がかかるかわからない。活用も検索もしにくい。当時の研究のためにも向いていないと考える。冊子本の方が分量の点から察するにはるかに合理的であろう。

『水原抄』は『紫明抄』や『河海抄』と違って、誰かに献上するために作られたものではないと考えられる。少なくとも、そのような記録はない。従って、『水原抄』は著者、親行の周辺で使われていたものであり、それゆえに、あまり普及していなかったのかもしれない。この点で『水原抄』は『光源氏

物語抄』とかなり似たような環境において用いられたと考えられるのではないか。『光源氏物語抄』の伝本は、完本としては一種類しか現存していないが⁽¹⁸⁾、幸い残っているのが、『河海抄』の中に引かれている注釈が多くあることが確認できる。この本は元々名前がないともいえる注釈ゆえ、『河海抄』では『光源氏物語抄』から引用したということが一切示されない。現存している『光源氏物語抄』がなければ、誰もこの本からの引用だと判断することができないのである。

『水原抄』のほとんどの内容は源親行の手により作られたものである。親行は河内本『源氏物語』を校合した人物であり、四辻善成も河内本『源氏物語』を使用して、『河海抄』を作った。このように、『源氏物語』の知識を持ち、それなりに有名な学者でもあった親行は、自分の知識が一番だとおもわず、何か疑問があつたら、他の学者たちに伺い、『水原抄』に記した。『水原抄』が現存しなくても、『水原抄』の逸文から、親行のその積極的姿勢がくみとれる。

一方、『葵巻古注』はどのような古写本か、あらためて考えてみると、残念ながら、現在のところ、実物にふれる機会が得られないため、複製本などによって確認したまでだが、それでも、『葵巻古注』はとても古くてきれいな卷子本であることがわかる。たとえば一行の字数、行幅、本文の位置、裏面の注釈の位置など、よく計算されて丁寧に作られたものであることが容易に確認可能である。この点に対して、実物をよく検討した池田氏は、次のように言及していた⁽¹⁹⁾。

〔葵巻古注〕は書写年代は断じて鎌倉末期を下るまいと思はれ、能筆とは言はれないが、ある原本があつて、それを忠実に模写しようとする意図を自ら示してゐる。恐らくは家の秘本としようとして浄書したものか、或いは然るべき地位の人に贈らうとして写したものと察せられる。書風は古筆家が一般に書家流となす所のものである。巻首にはやや厚手の鳥の子に、表面は金欄、裏面は金箔を張つて表紙及び見返しとなし、竹の軸を付す。これ等の金欄、金箔は巻尾の水晶の軸と併に後人の付す所である。

「家の秘本」として「浄書」された可能性にも言及があるが、池田氏が二つ目の可能性として述べる通り、この古写本は非常に丁寧に作られたもので、「然るべき地位の人に贈らうとして写したものだ」という推定が正しいと思う。このように丁寧に作られた卷子本は、当時の学者たちが研究上使つたとは考えにくい。むしろ、誰か(相対的に)高い地位の人に向けて、『源氏物語』の本文に、本文区分や簡略な注釈を添え、『源氏物語』を研究するのではなく、ある程度のスピードで読み進めることができるような写本を作ろうとした可能性が考えられよう。そのように想定してみると、親行の研究上の重要な記録ともいふべき問答形式の注釈内容が削除されていることも納得されるのではないか。

まとめ

本稿では、まず『葵巻古注』がどのような古写本であるのかという点をおさえた後に、池田論文が提唱した『水原抄』は卷子本であつたとする説の根拠について検討した。池田氏は、『原中最秘抄』の奥書における「帖」と「巻」の使い分け、同じく『原中最秘抄』の注釈の中にあつた「裏ニアリ」という言及などから、『水原抄』は卷子本であつただろうと推測したが、その説は容易にはなり立ちにくいことを確認した。また、豊富な内容があるから、卷子本形式のほうが自然だという池田論文の指摘についても、根拠が乏しいばかりか、むしろ冊子本の方が大量の注釈を掲載するのに向いているということを指摘した。

次に、池田氏が『水原抄』の逸文から推察した『水原抄』の性質だが、そのうちの『源氏物語』研究に関する古人の逸話の如きものを記したるものに相当する注釈が『葵巻古注』に全くみられないことを重視した。池田論文より後の先行論ではこの確実な特徴を『水原抄』の性質から削除してしまつたが、稿者はこのタイプの注釈こそが『水原抄』の重要な部分であり、それが『葵巻古注』にみえないのは、少なくとも『葵巻古注』が『水原抄』そのものとは考えにくいことを示唆していると判断した。

さらに、『葵巻古注』の注釈の中に引用された『源氏物語』本文に異同がみられるという問題もある。もし、『葵巻古注』が『水原抄』そのものだとしたら、このような異同は起こらなかつたと考えられる。

これらのさまざまな点をふまえてまとめらるれば、『葵巻古注』が『水原抄』そのものに相当するとは到底考えられないのである。あえて推測を重ねるならば、『水原抄』をベースにして、そこから適宜取捨選択された注釈を『源氏物語』本文に添えていったものと考えられよう。

最後に、『葵巻古注』の利用者については、池田氏の論文にも一例として想定されていたように、誰か高い地位の人物に献上するために作られたと推測した。鎌倉時代の『源氏物語』古注釈においても、室町期以降と同様に、学者が利用するための本と、献上される本というように、利用目的が異なるものが併存していたものと推測するのである。

注

- (1) 池田亀鑑「水原抄は果たして佚書か」『文学』第一巻第七号、一九三三年十月。池田論文では『葵巻古注』の前半に相当する七海本だけが扱われた。後半部の吉田本はまだ発見されていなかったのである。なお当初から、『葵巻古注』は『源氏物語古注』と呼ばれてきた。伊井春樹編『源氏物語 注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一年）も「源氏物語古注」として立項している。寺本直彦『「水原抄」と『原中最秘抄』との関係―源氏物語古註葵巻の考察の選定として』（『源氏物語論考・古注釈・受容』風間書房、一九八九年、初出は一九八五年）で、初めてこの本が『葵巻古注』と呼ばれるようになった。「源氏物語古注」と呼ばれる注釈書は他にもあって、たとえば右の『源氏物語 注釈書・享受史事典』では計四種が並ぶ。紛らわしさを回避するため、本稿では、寺本論文に倣って『葵巻古注』の呼称を用いる。
- (2) 重松信弘「七海兵吉氏所蔵葵巻」『源氏物語研究史』刀江書院、一九四五年
- (3) 寺本直彦、注(1) 論文
- (4) 田坂憲二「源氏物語享受史論考」の第三章「水原抄」風間書房、二〇〇九年
- (5) 伊井春樹編『源氏物語 注釈書・享受史事典』東京堂出版、二〇〇一年
- (6) カラーヌワット・タリン「『葵巻古注』(七海本・吉田本)の注記―鎌倉時代の『源

氏物語』古注釈との比較から」『平安朝文学研究』復刊第二十一号、二〇一三年三月

(7) 池田亀鑑、注(1) 論文

(8) 卷子本形式をとる『源氏物語』古注釈としては、他に南北朝時代の書写と推定されている伝浄弁筆『源氏物語古注』(「若紫」巻(東京国立博物館蔵本)ならびに「末摘花」巻(慶應義塾図書館蔵本)があるものの、川上新一郎「伝浄弁筆源氏物語古注翻刻と略解」(『斯道文庫論集』第四十輯、二〇〇六年二月)が明らかにしているとおり、両本とも「冊子改装」、すなわち元の冊子本から卷子本に改装されたものである。

(9) 松田武夫「源氏物語古註解題」(紫式部学会編『源氏物語 研究と資料―古代文学論叢第一輯―』武蔵野書院、一九六九年)

(10) 『葵巻古注』の七海本の複製本(一九三五年一月、古文学秘籍複製会から刊行された)によって確認すると、ほとんどの注釈は三、四行にまとめられている。それより長い内容もあつたが(最大で八行程度)、その項目数はせいぜい五項目程度である。

(11) 池田亀鑑、注(1) 論文で「この古写本は、上述のやうに、あらゆる点から考へて、『水原抄』の性質と形態とを完全に具えてゐると云ふことが出来る」と述べている。

(12) 重松信弘、注(2) 論文

(13) 寺本直彦、注(3) 論文

(14) 田坂憲二、注(4) 論文

(15) 池田亀鑑、注(1) 論文では「筆者は河海抄さへもその秘本は卷子本であつたと信じてゐる」と述べる。

(16) 池田亀鑑、注(1) 論文

(17) 新美哲彦「光源氏物語抄」から『河海抄』へ―注の継承と流通―『文学・語学』一八六巻、二〇〇七年三月

(18) 『光源氏物語抄』の伝本はノートルダム清心女子大学本と書陵部本があるのだが、両本の字や仮名遣いが完全に一致するように書写されているので、これら二つの伝本を一種類ととらえておく。なお、書陵部本の第一帖は関東大震災により焼失され、四帖が残っている。

(19) 池田亀鑑、注(1) 論文

※『葵卷古注』の引用本文は後藤祥子（七海本）・吉田幸一（吉田本）両氏による翻刻「源氏物語古註 葵卷二卷」（『源氏物語 研究と資料―古代文学論叢第一輯―』武蔵野書院、一九六九年）に拠ったが、複製本などを参照して適宜あらためた箇所がある。

※古注釈書からの引用本文は、以下のとおり。

・『原中最秘抄』……池田亀鑑編著『源氏物語大成卷七 研究・資料篇』中央公論社、一九五六年

・『光源氏物語抄』……中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註積叢刊第一卷 源氏釈 奥入 光源氏物語抄』武蔵野書院、二〇〇九年

・『紫明抄』および『河海抄』……玉上琢弥編『紫明抄・河海抄』角川書店、一九六八年

なお、『葵卷古注』引用の際には、見出しにおいて同翻刻の頁数を示し、加えてその下に『源氏物語大成 校異篇』の頁数・行数も示すこととした。

The Relationship Between *Aoi no Maki Kochū* and *Suigenshō* : The Usage of *the Tale of Genji* Commentary in 12th-14th Century

Tarin CLANUWAT

Abstract

Suigenshō, written by Minamoto no Mitsuyuki and Chikayuki in 13th century, is one of the earliest *Genji* commentaries in *Genji* history. Even though *Suigenshō* was a very famous *Genji* commentary that was cited by many scholars, there are no known surviving copies. Researchers believe that it was lost in the early 15th century.

However in 1930, Ikeda Kikan, a famous *Genji* scholar, discovered *Aoi no Maki Kochū* : a rare, scroll-type *Genji* commentary. After he found this book, he claimed that it was a part of *Suigenshō*. Later, Shigematsu Nobuhiro published a declaration contrary to Ikeda's idea because the details in *Aoi no Maki Kochū* did not match of those in *Genchūsaihisshō*, which is a secret book associated with *Suigenshō*. The research did not advance any further until half a century later when Teramoto Naohiko concluded that because *Genchūsaihisshō* contained "secrets" that were not included in *Suigenshō*, *Aoi no Maki Kochū* could still be part of *Suigenshō* even though some details did not match *Genchūsaihisshō*. Finally, Tasaka Kenji mentioned in his paper that if there are no further opposing views, we should conclude that *Aoi no Maki Kochū* is *Suigenshō*.

Although many researchers believe that *Aoi no Maki Kochū* is *Suigenshō*, the previous research still contain many critical problems. For instance, beside the first paper by Ikeda Kikan, no other researcher justifies why *Suigenshō* would be in a scroll format. Researchers only concentrated on details written in the scroll, but not why it was made into a scroll. Another critical problem is that *Aoi no Maki Kochū* does not contain commentaries in the question and answer format that was very common in the Kamakura period and found in many excerpts of *Suigenshō* remaining in other commentaries. In this paper, I will discuss these critical problems and prove why I think *Aoi no Maki Kochū* is not *Suigenshō*.